

東日本大震災・原子力災害伝承館

東日本大震災・原子力災害伝承館

企画広報課 渡邊 薫

伝承館の紹介

東日本大震災・原子力災害伝承館 企画広報課の渡邊 薫と申します。震災前はもともと東京に住んでおりましたが、被災地に来て仕事をするようになってから、私自身が防災力を身につける必要性を痛感したため、以前の職場にいた2014年に防災士の資格を取得いたしました。今回はそうした防災士としての視点をも通して、お話が出来ればと思っております。

2020年9月、避難指示解除から半年余り経った福島県双葉町中野地区に、東日本大震災・原子力

災害伝承館が開館しました。今年3月に、東日本大震災から10年という節目を迎えましたが、震災と原子力災害による未曾有の複合災害を経験した教訓を、国や世代をこえて伝えるとともに、復興に向けて着実に進む福島県の姿や、これまでに国内外からいただいたご支援に対する感謝の想いを発信する施設であります。

伝承館には次に掲げる3つの理念がございます。

- ① 原子力災害と復興の記録や教訓の「未来への継承・世界との共有」
- ② 福島にしかない原子力災害の経験や教訓を生かす「防災・減災」



伝承館（外観）

③ 福島に心を寄せる人々や団体と連携し、地域コミュニティや文化・伝統の再生、復興を担う人材の育成等による「復興の加速化への寄与」
また当館には以下の4つの主要事業があります。

① 収集・保存

震災関連資料を収集・保存し、その中にはデジタルコンテンツによるオーラルストーリー等の記憶も残します。現時点で約24万点の資料を収集。

② 調査・研究事業

複合災害の経験と記録を体系化し、教訓を抽出する。それを生かし、原子力防災の充実・強化と専門分野の人材育成につなげます。

③ 展示・プレゼンテーション事業

震災以前の地域の様子から始まり、事故当時の状況、その後に復興へ向けた取り組み等の福島の「光と影」を伝えます。

④ 研修事業

原子力災害の経験に基づく研修プログラムの提供として、学校・一般団体向けの「一般研修」と、今後実施する予定の自治体・企業等向けの「専門研修」があります。

展示の特徴

伝承館の展示室は、収蔵庫やサーバー室とともに施設の2階に配置されています。当館は海から1km以内に位置することから、万が一にも浸水があった場合を想定して、貴重な震災関連資料が決して失われることのないように考えられて設計されたものです。「万が一と言われることでも起こりうる」という震災の教訓を来館者に伝えるに際して、建物の設計にもその関連性を反映させる意図がありました。2階の展示室は以下のとおり、全部で5つのゾーンに分かれております。

【第1ゾーン】「災害の始まり」

事故前・事故発生時・事故直後の経過を時系列



第1ゾーンの展示物

でたどり、複合災害の記録を、臨場感を以って克明に発信します。

【第2ゾーン】「原子力発電所事故直後の対応」

避難所での生活、国内外のマスメディアによる当時の伝え方、国内外からの支援等を通して、事故直後の状況を振り返ります。

【第3ゾーン】「県民の想い」

震災前の平穏な故郷の日常が、事故を契機にどのように変化したのか、証言や思い出の品を通して、事故直後の状況を振り返ります。



第3ゾーンの展示物

【第4ゾーン】「長期化する原子力災害の影響」

原子力災害が長期化したことによる影響とその

対応について、資料や解説を通して学んでいただけます。

【第5ゾーン】「復興への挑戦」

困難を乗り越え、復興に挑戦する福島の姿を紹介し、来館者の方々に福島の未来について、一緒に考えていただきます。



第5ゾーンの展示物

展示の大部分を原子力災害関連の資料が占め、事故直後の発電所の状況・長期かつ広域の住民避難・放射線による県民生活への影響等、原発事故に係る資料を多数展示しており、被災者や被災地の目線で展示内容が構成されていることが当館の特徴です。また約200点の「実物資料」展示に加

え、デジタルコンテンツによる「証言映像」によって、来館者の方々に震災当時の出来事を、臨場感を以ってご覧いただけるよう工夫に努めております。

防災対策

現在伝承館が建っている区域は、太平洋岸から1 km以内と近いため、東日本大震災時には浸水を免れませんでした。震災後にこの地域の海岸沿いに堤防が築かれ、約1 mの嵩上げが行われたことから、海岸沿いについては現在も2 m以上の津波リスクが一部に残りますが、少なくとも伝承館が建つ陸側については、津波のリスクは殆ど無いと想定されています。しかしそれでも、東日本大震災における教訓は「万が一と言われることでも起こりうる」という点にありました。

仮に地震によって津波が起きた場合の避難方法としては、津波が押し寄せるまでの時間によって、時間が短い場合には津波の高さも考慮に入れながらの垂直避難も場合によってはあり得ますが、基本的には海岸から少しでも遠く離れる水平避難を基本としております。

常磐自動車道双葉インターチェンジと県道広野



上空から見た伝承館

小高線を東西に結ぶ「復興シンボル軸」をひたすら西へ国道6号線を目指して避難することになっております。

一方、館の命とも言える展示物には、現物資料と情報資料があります。ともに教訓を後世に伝えるために失われてはならないものであり、これらが浸水により被害を受ける事態を避けなければなりません。先ほども「展示の特徴」のところで申し上げましたが、こうした津波災害を意識して、「展示室・現物資料の収蔵庫・サーバー室」はすべて2階に設置されています。さらに電源施設は屋上に配置していますが、これは震災当時、福島第一原子力発電所の原子炉の冷却に必要な電源装置が、津波の浸水により失われたことへの教訓と関連性を持たせていることに起因いたします。

伝承館が立地する中野地区は、津波リスクが少なることを踏まえ、企業立地等の産業用途への転換が図られています。また住宅等が無いため、施設自体の避難所としての想定は現在のところありません。したがって備蓄等においても、避難者の分までは想定されておらず、あくまで職員スタッフの人数分に限られた備蓄量に設定しております。現在は1人あたり2ℓのミネラルウォーターを1本確保している状況で、それらは館内1階の救護室にまとめて保管しております。今年度に1人あ

たり2本、そして来年度には3本配布が出来るようにする予定ですが、そちらは同じ場所ではなく、各自のロッカーに入れるなり分散して保管するようにして、集中管理のリスク回避を図る予定です。また今後は、少なくともある程度の来館者の方に対応する人数分の備蓄は必要と考え、準備する予定でおります。

最後に

災害を経験された方々の生の声を聴く「語り部講話」や、津波や原子力災害で被災した施設や浜通りの現状を視察する「フィールドワーク」を通して、実際に自分の耳で聞き、また目で見ることによって、災害を「自分事化」することができます。未曾有の複合災害がもたらした影響と、復興の現状・課題について、来館者の方が自ら体感し自分自身で考えることで「教訓」が得られるものと考えます。ぜひ多くの皆様にご来館していただき、それぞれの「学び」を皆様ご自身の今後に活かしていただきたいと思います。この度このような貴重な場をいただいた「一般財団法人 消防防災科学センター」の皆様へあらためて感謝とお礼を申し上げますとともに、終わりのご挨拶とさせていただきます。